有利になる。欠席・遅刻に関する規範は、この活動時間の確保に係わっている。

関西学生吹奏楽連盟は毎年コンクールを開催して、参加校の入賞記録を作成保持している。これらの記録や複数の連盟役員による評定に基づいて、連盟傘下の吹奏楽部を成績上位群と下位群とに二分し、部員の参加動機、集団の目標、リーダーシップ、勢力構造、規範、凝集性、コミュニケション、などなど種々の集団特性を質問紙調査によって測定し比較する中で（佐々木，1970)、種々の相違点に混じって欠席・遅刻に関する規範の差が浮かび上がってきた。

3年後、関西学生アーチェリー連盟傘下の洋弓部を対象に同様な調査分析を行ったところ（佐々木，1973)、これらの規範に限っていえば、差の方向は同様ながら差の幅はかなり縮小されたものであった。

これら2つの研究の間におけるこの相違は、一方が吹奏楽他方がアーチェリーという活動の相違、とくにそれが集団の成績として判定される時の係わり方の相違にあると解釈された。すなわち、吹奏楽では個々人の演奏能力がいくら高くても全体としてのハーモニーが出せなくては成績を上げることができないのに対し、アーチェリーでは団体戦といえども（先鋒から中堅をへて大将まで、微妙な心理的影響が全くないわけではないが）基本的には集団の成績は個々の選手の成績の合計で決まるとみてよい。このことは練習の仕方にも相違をもたらす。一斉練習が重要であればあるほど、遅刻が厳しく咎められることになろう。佐々木（1995a）は、これら2つの調査研究から欠席・遅刻に関する規範の結果を抜粋して比較・考察したものである。

この問題を再度検討する機会が与えられたのは、さらに3年後関西野球連合傘下の大学野球部について調査研究が行われた時であった。野球はメンバー間の連携プレーを必要とする典型的なスポーツといえよう。しかも集団の成績が得点や勝敗によって明瞭に把捉できる。アーチェリーと吹奏楽の比較によって見出された上記の差異は、アーチェリーと野球との比較において（おそらく、いっそう明瞭に）認められるであろう、と予測された。佐々木（1995b）は、この予測を確証している。

集団成績の上位・下位が判別し易い、上記の学生クラブを対象としたこれらの研究から、欠席・遅刻に関する規範と集団の成績との関係について次のように総括できるであろう。

欠席に関する規範および遅刻に関する規範の厳しさは集団の成績と正の相関を示し、その相関値は、集団成績が成員間の協応に依存するほど、大きくなる。因果の方向は規範から成績への方向にあると思われるが、これまでのところ実験による検証は行われていない。また、これら2種の規範の間には、集団成績に対する関係（ないし効果）に関して際立った差異が認められていない。2つの規範を併せて「参加に関する規範」（または単純に「参加規範」）と総称することができよう。

生産水準規範と集団生産性との関係はいくらか複雑である。佐々木（1963）の予備的研究や佐々木（1966a）の実験が示唆しているように、リーダーや外部からの特別な指導や働きかけがないところでは、実際の生産量に導かれて規範が形成されていくものと思われる。他方、佐々木・山口（1971）の実験や佐々木（1994a & 1994b）の調査研究が示すように、リーダーシップのありようは集団の生産性と同時に生産水準規範や欠勤・遅刻の規範の形成にも影響を及ぼす。佐々木（1998）の実験はさらに、いったん形成された生産水準規範は、リーダーが不在になっても、集団生産性をある期間現状のまま維持する働きをもっていること、そしてまた、いったん形成された生産水準規

注　この他に、話し合いの場面における発言頻度に関する規範を扱った研究には下記があり、
山口・佐々木（1971）　訓練キャンプの集団力学的研究
関西学院大学社会学部紀要　第23号　101-113.
山口・佐々木（1973）　訓練キャンプの集団力学的研究（II）
関西学院大学社会学部紀要　第26号　87-97.
また、授業中の私語に関する規範を扱った研究（卜部，1996）などがある。
卜部敬康（1996）　集団規範の実証的研究
関西学院大学大学院社会学研究科　1995年度修士論文